

大橋 賢二さんの手記

いつものように、「行ってきます」と家族に声がけし、家を後にしました。途中何もなく電車を乗り継ぎ、地下鉄四ツ谷駅にていつもの乗車位置で乗車しました。乗った瞬間、甘い香りが鼻に付き、この瞬間が忌まわしい地下鉄サリン事件の始まりでした。その後、入院治療、通院、自宅療養を経て、四月より会社勤務に就きました。しかしこの間を含め、私の体調は今まで経験をしたこともない特に頭痛、目まいなど最悪の毎日が続き、とうとう長期自宅療養、薬剤の服用となり、会社での対応もこれまでになく厳しい方向へ進み、例えば失職、首となるような話もあり、体調不良の中、再度勤務に就きました。その後の私は、職場では自分の殻にこもり、人付き合いも悪くなり、家庭では、体調の具合で休日はほとんど横になり寝ていました。当時、子供達は小学生と幼稚園生で、一番家族との絆が大切な時期なのに、体調不良のため、一緒に遊ぶ、出かける、お話をする、学校行事などに進んで参加することが出来ず、当時の自分自身を、今振り返って観ると最低の父親でした。

その後、年を重ね、自分自身の体の具合も通院治療、薬の服用量も減り、職場勤務については多少の余裕も生まれて、無事定年退職を迎える事が出来ました。そして、家庭内についても三人の子供達は、何の問題なく無事に大学を卒業し、社会へと羽ばたいています。

サリン被害に遭い二十数年、六十歳を過ぎたころの私自身の体の具合は、一月ごとに精神科へ通院し、大量の薬が処方され、頭痛が残っていて、ふらつき、季節の変わり目などの体調不良に苦しんでいました。

月日もながれ地下鉄サリン事件から三〇回目の三月二十日を迎えようとしている今、通院治療、薬の服用は続き、失った物事は測り知れず、普通ではない人生を過ごしてきた事を、自身でも不思議に思います。

七十歳古稀を迎え、今後もサリンを背負い、まだ生きると思います。「お元気ですか」、「私は元気です」を唱えて、失った人生を挽回しつつ、残りの人生過ごしていきます。

(2024年10月記)

[過去の手記はこちら](#)